日本医史学雑誌第三十六巻第三号
平成二年七月三十日発行　平成元年十一月二十五日受付

エディンバラ王立救貧院病院とアグネス・ベッチ

平尾真智子

はじめに

わが国における近代看護教育の導入期において直接生徒の教育に携わった外国人看護婦は、有志共立東京病院のミス・リード、京都看病婦学校のリンダ・リチャーズ、医科大学第一医院のアグネス・ベッチの三人である。このうちのアグネス・ベッチについては、これまで日本側の資料で、ナイチンゲール看護学校の卒業生であるという以外にわかっていることは少なかった。(一)このたび、イギリスのロンドンおよびエディンバラより、アグネス・ベッチの人物的背景について若干の資料が得られた。(二)本論では、近代看護教育開始にあたって指導的役割を果した外国人看護婦のひとり、アグネス・ベッチの経歴・教育的背景について述べるとともに、彼女の来日の意義を、ナイチンゲール方式の世界への普及という側面から述べてみたい。

一　アグネス・ベッチの人物的背景

最初の資料は、一九七二年に、エディンバラ王立救貧院病院看護学校の百年記念祭が行われた時に発行された同校の百年記念誌 "The centenary edition of the Pelican and Nurse's League Journal of the Royal Infirmary Edinburgh School

資料 1　E王立救貧院病院看護学校百年記念誌に寄せた姪によるA.ベッチの思い出

AGNES VETCH

(1842-1942)

As children, we heard many dramatic tales of an almost legendary aunt, whom we had never met—who had crossed the seas in the old days of sailing ships, been shipwrecked, reached far-off Japan and lived in the Australian Bush, but the greatest achievement was her acceptance by the Old Royal Infirmary, in Infirmary Street, as one of their first "lady probationers".

At the end of her long life I was privileged to be with my aunt when her memories were still vivid and very individualistic—but confused.

In this centenary year, the first Training Register of the Royal Infirmary of Edinburgh reveals that these tales were not family "legends" only! There we find her name as having been accepted for training on 29th May 1874. The name next to hers is that of Lucy J. Phillips, to whom she always referred as "my little friend, Lucy" (of whom more anon). Ten months later Agnes Vetch had completed her probationary training, and on the following day was put in charge of Dr Balfour's male ward!

True to the Nightingale tradition of spreading the new system of nursing training, a little band of nurses, under Miss Williams as Matron, was sent off to St. Mary's, Paddington. Agnes Vetch went as a sister. She returned in 1879 on the opening of the present Royal Infirmary and again was put in charge of Dr Balfour's male ward, which, during the first year of her absence was under the care of her friend, Lucy Phillips.

As the old Register then reports, "at her own wish" she left Edinburgh in 1881 and soon after sailed for China, where her brother was a medical missionary. At that time Japan was just beginning to come under Western influences, and at the request of the Empress the great opportunity came, and Agnes Vetch was sent to carry to that awakening country the Nightingale system of nursing. We still have her photograph, complete with kimono and fan, and one of her trainees literally "at her feet".

Always a great traveller, she made several journeys, in these early days, back to Scotland, until another sailing ship took her to Australia. Here she worked and travelled extensively, making many friends. Here, too, she met up again with R. L. Stevenson, a family friend of Colinton days—but he did not seem to care for her TOO efficient nursing!

Her last journey home was made in 1938, during the Munich crisis. At Colombo the Captain warned the passengers of impending war in Europe and gave them the chance to return to Australia—an offer which was met with scorn by his oldest passenger!

The following year she celebrated her 97th birthday in Edinburgh, with only one visitor—her "little friend" Lucy (née Phillips). It was a strange meeting of the two who had trained together in this city so long ago—been separated by many years and many miles, and whose lives had followed very different courses. Soon after her training Lucy Phillips had married the heart specialist of that time, Dr George Gibson, and at the time of this meeting was living in the home of her son-in-law, Professor R. W. Johnstone—still the links with the Royal Infirmary and the strong ties of friendship. The circle seemed complete.

Agnes Vetch died in her native land in her 100th year—confused indeed, but happy in her memories of a life so full of opportunity and service.

E. M. VETCH

The centenary edition of the Pelican and Nurse's League Journal of the Royal Infirmary Edinburgh School of Nursing in 1972. P9-10.

of Nursing in 1972" で、この中に卒業生の紹介文が掲載されており、アグネス・ベッチの姪にあたる E.M. Vetch がおばの思い出を記述したものである（資料1）。以下はこの資料の要約である。

アグネス・ベッチは一八四二年にエディンバラに生まれ、一九四二年に百歳という長命を全うし亡くなっている。彼女は一八七四年五月二十九日、旧エディンバラ王立救貧院病院看護学校の第一回訓練生となった。彼女はレディの見習生であった。一〇ヵ月の訓練を修了後、同病院の男性病棟の係となり、その後ミス・ウィリアムズとともにセント・メアリ病院に行った。ここではシスター[五]として働いた。一八七九年に現在のエディバラ王立救貧院病院の開院のために戻ってきている。

一八八一年には自分の希望で中国に行った。ここでは彼女の兄弟が宣教医をしていた。当時日本はちょうど西洋の影響が深まりつつあった。日本の皇后陛下の求めにより、アグネス・ベッチは、目覚めつつある国にナイチンゲールの看護方式を紹介するために派遣された。彼女が日本で教えた訓練生と一緒に写した写真がいまでも残っている（図1）[六]。

図1　A. ベッチと訓練生

彼女は旅行が好きで、前半生には何度か旅をしている。オーストラリアには長く滞在した。ここには彼女の友人であるR・L・スティーブンソン[七]がいたが、彼は彼女に看護をしてもらいたいとは思わなかった。彼女の最後の旅は、一九三八年で九十六歳の時である。ヨーロッパは第二次世界大戦の危機にあったが、勇敢にもオーストラリアより帰国している。九十七歳の時には、看護学校時代に同じ訓練生であった友人と二人で誕生日を祝っている。彼女は生まれ故郷で百歳で亡くなった。

資料 2　1873年から93年までのA.ベッチの成績証明書

21.

REGISTER OF NURSES TRAINED IN THE

PERIOD OF TRAINING Aug. 2nd 1874 to Aug. 2nd 1880

NAME. Agnes Betch

DESCRIPTION. Aged 30, single, without previous occupation
Recommended by Rev. R. Wemyss and Miss Randall, Haddington.

PARTICULARS OF TRAINING. She was seven months in Surgical wards, ten weeks in Medical, absent a fortnight. Probation completed in ten months.

REMARKS. Quite excellent in character, thoroughly efficient, particularly gentle and kind. She has the art of making her ward homelike.

SITUATIONS. She was placed on the 1st April 1880, and given charge then of Dr. Balfour's male ward. Left 25th Nov. 1876 to go with the St Mary's Hospital, London, as a Sister. (One of a family of six given to Miss Williams.) Returned 3rd Oct. 1879, on the opening of the new Infirmary, to take charge of Dr Balfour's male ward.
Left off duty with 8th December 1881. Came to help us on different occasions afterwards.
Later went to Japan to visit a brother, & while there introduced the Nightingale system of training nurses into Japanese hospitals.

資料 3 資料2をタイプしたもの

TRANSCRIPT OF TRAINING REPORT OF AGNES VETCH FROM REGISTER OF NURSES TRAINED IN THE ROYAL INFIRMARY OF EDINBURGH, DEC1873-AUG 1893 (LHB1/97/1)

Period of Training:	May 29th 1874-March 31st 1875
Name:	Agnes Vetch
Description:	Aged 30, single, without previous occupation. Recommended by Rev. N. Wanscop(?) and Miss Randall, Haddington
Particulars of Training:	She was seven months in the Surgical Wards. Ten weeks in Medical, absent a fortnight. Probation completed in ten months
Remarks :	Most excellent in character, thoroughly obedient, particularly gentle and kind. She has the art of making her ward homelike.
Situations:	She was placed on the staff 1st April 1875, and given charge of Dr Balfour's male ward. Left 25th Nov.1876 to go to...St Mary's Hospital, London, as a sister (One of a band of six given to Miss Williams.) Returned 30th Oct 1879, on the poening of the new Infirmary, to take charge of Dr Balfour's male ward. Left of her own wish 11th November 1881. Came to help us on different occasions afterwards. Later went to Japan to visit a brother, (and) while there introduced the Nightingale system of training nurses into Japanese hospitals.

資料2は、エディンバラ大学図書館医学史料センターのバーフット博士よりお送りいただいたもので、エディンバラ王立救貧院病院の、一八七三年十二月から一八九三年八月までの「看護婦訓練簿」(八)の中の、アグネス・ベッチの訓練報告の成績証明書の原文の写しである。また、同氏のご好意により、手書きの原本の英文をタイプにして読みやすくしたものもお送りいただいた(**資料3**)。以下は資料3を和訳したものである。

看護婦訓練登録簿

訓練期間　一八七四年五月二十九日から七五年三月三十一日

名　前　アグネス・ベッチ

人　柄　三十歳、独身、職歴なし、ヘディントンのワンスコップ宣教師、ミス・ランドルの推薦による。

訓練の詳細　外科病棟で七ヵ月、内科病棟で一〇週間、欠席一四日間。見習い期間は一〇ヵ月間。

評　価　性格は一番優れている。まったく

正直、特別に優しく親切である。彼女は病棟を家庭のようにする技術をもっている。

職業　彼女は一八七五年四月一日に職員の地位を得、バルフォア医師の男性病棟の勤務についた。一八七六年十一月二十五日に、ロンドンのセント・メアリ病院にシスターとして行った（ミス・ウィリアムズの六人の小集団のうちの一人）。一八七九年十月三十日、新しい救貧院病院の開院にあたりバルフォア医師の男性病棟の勤務につくために戻った。彼女自身の希望で一八八一年十一月十一日に辞職した。結局困難な時に私達を助けるために来た。後に兄弟を訪ねるために日本に行った。そしてそこで、日本の病院に看護婦訓練のナイチンゲール方式を紹介した。

これらの資料から、アグネス・ベッチはエディンバラ王立救貧院病院看護学校の第一回訓練生であり、レディの見習生であったことがわかる。彼女の訓練期間は十ヵ月、人物的にはたいへん優秀で、"Excellent" の評価をもつ優れた生徒であった。また訓練期間中の欠席の日数が一四日間であり健康的にも恵まれていたことがわかる。(九)

アグネス・ベッチは、訓練修了後、エディンバラ王立救貧院病院の看護婦として二年間勤務し、一八七六年にはミス・ウィリアムズとともにロンドンのセント・メアリ病院に行き、シスターとして看護婦の訓練に携わっている。一八七九年には、病院の拡張のため移転新築された新しいエディンバラ王立救貧院病院に戻り、看護婦として勤務している。一八八一年には病院を辞職し、自分の希望で中国にやって来た。そして日本の病院に看護婦訓練のナイチンゲール方式を紹介したのである。

二　ナイチンゲール方式の普及とエディンバラ王立救貧院病院

(一)　ナイチンゲール看護学校の創設

クリミア戦争の際に国民から寄せられた寄付金をもとにした「ナイチンゲール基金」は、ナイチンゲール基金審議会に

よって管理されていた。[10] ナイチンゲールは、学校をひとつ作るために彼女の基金を使う決心をした。審議会は、養成学校設立の交渉の段階に入り、ナイチンゲールの意向を尊重し、セント・トーマス病院理事会と契約を結んだ。

契約が署名されると、審議会は、一八六〇年六月七日のタイムズ紙上に生徒募集の広告を掲載した。その内容は二十五歳から三十五歳までの婦人を対象に、セント・トーマス病院で病院看護婦として一年間無料で教育を行うというものであった。見習生には賄いつき宿舎を用意し、茶・砂糖・上着および年一〇ポンドを支給する。見習生は婦長の監督のもとにシスターおよび常勤医師から指導を受ける、というものであった。

六月二十四日に一五名の女子が入学し開校された。細心・節制・公平・忍耐をモットーとし、立派な人格の女性であることが要求された。教育は一年であったが、ナイチンゲール見習生としてホームでの一年を終えたあとも、さらに経験を積ませるために、彼女たちをセント・トーマス病院の職員に任用する習慣になった。一九〇〇年までに、特別見習生（レディもしくは有給生）は三年課程となり（見習生としてホームで一年、看護職員として二年）、普通見習生は四年課程（ホームで一年、看護職員として三年）[11] となった。

(二) ナイチンゲール方式のイギリス国内への広がり

ナイチンゲールにより改革された看護は、医師にも病院当局にも好意的に迎えられた。この方式はまずイギリス国内に広まった。ロンドンでは一八六七年から一八九九年までの間に、ミドルセックス病院を初めとする九つの病院にナイチンゲール看護学校の卒業生による看護学校が開設されている。[12]

看護の改革がもっとも必要であったのは「救貧法」に基づく病院であった。ここの病院では、病弱な貧民の看護は主に弱り方の少ない貧民仲間の手に委ねられていた。一八六二年に、リバプールの王立救貧院病院に卒業生のメリーウェザーが、一八六五年同じくリバプールのブラウンローヒル救貧院病院にアグネス・ジョーンズが派遣された。

スコットランドでは、一八七三年から一八八五年の間に、エディンバラ王立救貧院病院を初めとする五つの病院に、ナイチンゲール看護学校の卒業生による看護学校が開設された。アイルランドでは、一八七九年にダブリンのスティーブンス病院に、ナイチンゲール方式による看護学校が設けられた。(一三)

このようにイギリスにおいては、ナイチンゲール看護学校設立後約二五年にして、ナイチンゲール方式が定着した。

(三) エディンバラ王立救貧院病院看護学校

エディンバラ王立救貧院病院は、一七三六年に創立された。その前身は、一七二六年に設けられた医学生の教育のための小さな病院である。一七三六年にはジョージ二世の公認となり、エディンバラ王立救貧院病院となった。一七四一年に病院が拡張され、二二八名の患者の収容が可能となった。病院は、正面が二一〇フィートで、東西にそれぞれ七〇フィートの二つの病院をもった、四階建の立派な建物であった。西側の病棟は男性患者に、東側の病棟は女性患者に割りあてられた。中央の屋根裏は大きな手術場となっており、二〇〇名の医学生を収容することができた。(一四) 看護はふつう看護婦と臨時看護婦によって行われていた。それぞれの病棟はふつう看護婦が責任をもち、彼女たちの仕事は、病棟の清掃、ベッドメーキング、患者の世話、薬局から薬瓶を運ぶことであった。臨時看護婦は、昼夜特別に、常時観察を必要とする患者のために雇われた。夜間は、ふつう看護婦は病院にいなかった。看護婦たちのいく人かは、人格的にも優れ、行動的、知性的であったが、多くは人格的にも優れず、確実性に欠け、非常に頼りにならないものであった。(一五) 看護部の改革は長期間遅れた状態のままで、この問題は懸案となっていた。

一八七二年、ロンドンのナイチンゲール基金委員会は、熟慮のすえ、ミス・バークレイを最初のレディの看護婦監督として契約した。「ナイチンゲール」の名とともに後世に長く知られたセント・トーマス病院の看護婦の一団も、彼女とともにやってきた。ミス・バークレイは、エディンバラに学校を設立した。彼女はよく教育されたクエーカー教徒であった

が、麻薬とアルコールの常用者であったため、一年間で辞職させられた。[一六] その後任となったのがナイチンゲール看護学校の卒業生ミス・プリングル[一七]である。彼女は一三年間にわたって同校のマトロン（婦長）を務めたあと、エディンバラで学校教育を開始し、セント・トーマスの学校に引き続き、夜間における適切な医療と大学教育との協力という前進をもたらした。[一八] このような看護の改革により、エディンバラ王立救貧院病院の看護学校は国内でももっともよい学校のひとつとして認められるようになった。

エディンバラ王立救貧院病院は、一八七九年拡張のため移転、新築されベッド数五五五床となり、英国でもっとも大きい慈善病院となった。[一九]

三　ナイチンゲール方式の世界への普及

ナイチンゲール方式は、まずイングランドから広がりを示し、続いて大英帝国内、イギリスの直轄地・自治領、さらに世界の各国に伝えられ、着実な広がりをみせた。

世界の各国にナイチンゲール方式が伝えられた年代は次のとおりである。

一八六四…カナダ、一八六六…スウェーデン、一八六七…オーストラリア、一八七三…アメリカ、一八八三…ニュージーランド、一八八五…日本、一八八六…ドイツ・インド、一八八八…フィンランド、一八九〇…オランダ、一八九四…イタリア、一八九九…デンマーク・ギリシア、一九〇〇以前…南アフリカ・ノルウェー、一九〇〇…キューバ、一九〇三…中国、一九〇四…フランス・プエルトリコ、一九〇五…韓国、一九〇六…レバノン・フィリピン、一九〇七…ベルギー[二〇]

このように世界に伝えられたナイチンゲール方式の特徴としてセーマーは、

①マトロンが最高権威者である。マトロンは病院の看護、料理場、洗濯および家事雑事要員、看護学校、看護要員の任命と免職について責任をもつ。彼女は病院理事会に対してのみ責任がある。

②看護学生は寮で生活する。規律のためばかりでなく、教育上、道徳上の成果のためにも、彼女たちの生活の場（ホーム）は病院に付属させ「ホームシスター」の管理下におく。

③看護学生には基礎科学の教授を含めての学理的な教授を行う。

④病棟シスターは非常に威厳のある重要な立場を占めている。彼女はマトロンの指示のもとに、看護学生の実務教育に関して責任をもつ。(二一)

をあげている。さらにナイチンゲール方式を世界に伝えたナイチンゲール看護学校の卒業生は「ナイチンゲール看護婦」と呼ばれた。ナイチンゲール看護婦は「訓練するために訓練されており」彼女たちの特別の任務は、リーダーやパイオニアとして出ていくことであり、彼女たちは個人的に患者を看護する気持はないという印象を人々に与えた、といわれる。(二二)ナイチンゲール方式を世界に広める役割を果したのは、主に特別見習生（レディの見習生）であった。

四　ナイチンゲール方式のわが国への導入に関して

わが国では、一八八五（明治十八）年、高木兼寛とミス・リードによってナイチンゲール方式による教育が導入された。また一八八六年にはリンダ・リチャーズが来日し、翌一八八七年にはアグネス・ベッチの来日によって、それぞれナイチンゲール方式による指導が行われたのである。本論では、アグネス・ベッチに関する日本側の資料からナイチンゲール方式がどのように導入されたか考察したい。

(一)　アグネス・ベッチの日本における活動

ベッチの日本における足跡を日本側にある資料からまとめてみると次のようになる。

一八八七年九月六日、横浜に入港したシティ・オブ・シドニー号(二三)で来日したアグネス・ベッチは、一八八七(明治二十)

年十月二十七日から一八八八（明治二十一）年十月二十六日までの一年間医科大学第一医院に正式に看護教師として招かれている。明治二十年の東大の記録には、

医科大学第一医院看病法講義及看病術実地練習嘱託一ヶ月金八拾円給与但六ヶ月間[二四]

とベッチに六ヵ月間嘱託の辞令が出ている。そしてこれはさらに六ヵ月間更新されている。彼女の勤務時間は一日七時間であった。ベッチは医科大学第一医院で、桜井女学校からの依託生六名と同院の看護婦、付副看護婦に看護法の教授を行った。医科大学第一医院で教育にあたった一年間、ベッチは鈴木まさら桜井女学校の生徒とともに病院に近い本郷駒込西片町の借家に住み、病院に通った。[二五]

一八八八（明治二十一）年五月二十九日に医科大学第一医院をお見舞された皇后陛下は、特別の思召をもってベッチに拝謁を仰せつけられている。『昭憲皇太后御一代記』には、

外国人教師にはベルツ、スクリッパの両氏あり。又看護法の教師としてナイチンゲール・ホール出身のアグネス・ウキッチ女史もありたり。（中略）当日は有資格者の拝謁の外、特別の思召を以って前記ウキッチ女史及び看護法研究生総代大関ちか子等に破格の拝謁仰せつけられたる[二六]

と記されており、ベッチは日本の皇后陛下に会っている。

医科大学第一医院では、一八八八（明治二十一）年十月二十五日に卒業試験を実施し、翌日の十月二十六日、試験に及第した二八名に卒業証書を授与している。[二七] この卒業証書には特別にアグネス・ベッチの自筆の署名がされているのであるが、鈴木まさの卒業証書には特別に

Miss Suzuki has won her task as interpreter most officially and I consider her give to fitted to teach a class of nurse Agnes Vetch I.F.I.I.S., England[二八]

と書かれており看護教師として鈴木まさが適していることを証明している。

ベッチは一八八八（明治二十一）年十一月十一日、イギリス船アンコナ号[二九]で香港をめざし離日している。

(二) アグネス・ベッチの来日の経緯

アグネス・ベッチの日本における活動は以上であるが、彼女が来日するに至った直接的な経緯についてはまだわかっていない。ベッチの姪の記述には「皇后陛下の求め」によるとあり、日本側の資料でも、ベッチは医科大学第一医院で実際に皇后陛下に拝謁している事実は確認されている。しかし、皇后陛下が日本の看護婦養成にどのように関与したかについては、資料も少なく不明な点が多い。

図 2　A. ベッチ（『日本看護制度史年表』の口絵

また、ベッチの来日には「桜井女学校」が何らかの形で関与していると思われる。石原はベッチの来日について明治十七年とし、桜井女学校で教職についたあと一旦帰国し、観光のため再び来日したときに東大に招かれたとしている。[三〇] 彼女は桜井女学校の生徒を看護婦として訓練した。また、東大の医師で、ベッチが勤務した当時ともに医科大学第一医院にいた三宅秀も、ベッチを「桜井女塾で英語を教える傍ら看護学を教えたる者」[三一]としてとらえている。さらに中里によると、ベッチは桜井女学校の教師リンゼ氏のもとに寄寓していたことになっている。[三二] このリンゼ氏について、亀山は、スコットランド一致長老教会のトーマス・リンゼ氏ではないかと推論しているが、確証は得られていない。[三三] 桜井女学校の背後には米国長老教会が関係しており、桜井女学校との関連を知ることは、ベッチとキリスト教会、ミッションとの関係を知る手がかりになると思われる。ベッチの兄弟の中国における医療伝道にも、彼女とミッションとの関係をうかがわせるものがある。

石原がアグネス・ベッチとして紹介している写真（図2）がある。この写真は、昭和三十五年に発行された厚生省の『日本看護制度史年表』の口絵にあるもので、昭和三十六年の同氏の『高等看護学講座看護史』の口絵にも同じ写真が掲載されている。そしてこの写真には「厚生省の好意で明治時代の現物から複写した」と注意書きが付与されている。(三四) ベッチの日本における写真は、桜井女学校の生徒とともに写した写真（図3）(三五) が残っているだけであったが、この写真がほんとうにベッチのものだとするとベッチの写真は二枚あることになり、この写真の所在を追跡することで新たな事実が判明する可能性もある。しかし、現時点での所在は不明である。

図3　A．ベッチと桜井女学校の生徒

ベッチが来日した時期について確認されているのは、乗船名簿による明治二十年九月六日である。そして、医科大学第一医院に看護教師として雇われたのが同年の十月二十七日であるが、それまでの期間が約五〇日というのは正式な雇用契約の成立という面から考えると短かすぎるように思われる。石原は、ベッチの来日について明治十七年としているが、明治二十年以前の来日についても考えてみる必要がある。

おわりに

イギリスのエディンバラ王立救貧院病院看護学校の資料から、わが国における近代看護の指導者アグネス・ベッチについて知ることができた。ベッチは、ナイチンゲール看護学校の卒業生により創設された、ナイチンゲール方式によるエディンバラ王立救貧院病院看護学校の第一回卒業生であった。彼女は人物的には非常に優れた評価を得ており、また

資料 4 アグネス・ベッチ Agnes Vetch (1842～1942) の略歴

1842(1844?)	エディンバラに生まれる
⋮	
1874. 5. 29	エディンバラ王立救貧院病院看護学校に入学．第1回生
1875. 3. 31	10ヵ月の訓練を終了する
1875. 4. 1	エディンバラ王立救貧院病院の看護婦となる バルフォア医師の男性病棟の係
1876. 11. 25	ミス・ウィリアムズとともにロンドンのセント・メアリ病院へ行く．シスターとして看護婦養成計画に参加
1879. 10. 30	新エディンバラ王立救貧院病院の開院のためエディンバラに戻る．バルフォア医師の男性病棟の係
1881. 11. 11	病院を辞職し中国へ行く，中国では兄が宣教医をしていた
1887. 9. 6	シティ・オブ・シドニー号で来日
10. 27	医科大学第一医院の看護教師となる
1888. 5. 29	皇后陛下に拝謁
10. 26	医科大学第一医院における任期終了
11. 11	アンコナ号でホンコンをめざし離日
⋮	
＊1888～1894	スティーブンソン (1850～94)，南太平洋に航海する．ホノルル，サモア島に滞在，病弱，現地にて死去 ベッチ，オーストラリアには長く滞在，ここでスティーブンソンと再会
⋮	
1938	旅を終えて，エディンバラに落ち着く
1939	97歳の時，看護婦養成所時代のルーシーと再会
1942	死去

レディの見習生であった。セント・メアリ病院の看護婦養成計画にシスターとして携わるなど、看護婦訓練の経験も有していた。

日本へは、ナイチンゲール方式を広めるという目的をもってやってきた。医科大学第一医院の看護教師として一年間看護婦の訓練に従事し、桜井女学校からの依託生六名を含む二八名の看護婦を養成し、そのうちの一名については看護教師として養成した。

これまでに得られた資料からアグネス・ベッチの経歴をまとめると**資料4**のようになる。ベッチの日本での活動やそれを裏づける資料についてはまだ未確認のものも少なくない。しかし、短期間ではあったが彼女の日本での活動は、ナイチンゲール方式を世界に広めるという「ナイチンゲール看護婦」としての活動であったといえよう。ベッチの来日に至る経緯やわが国にナイチンゲール方式を導入しようとした日本側の諸条件については今後の課題としたい。

文献および注

(一) 中里龍英『日本看護史』五七五頁、文光堂、一九五〇年。

(二) これらの資料のうち一部についてはすでに報告されている。拙稿「わが国における近代看護教育に影響を与えたアグネス・ベッチの背景」『第二十回日本看護学会看護総合分科会学会集録』一五八～一六〇頁、一九八九年。亀山美知子「アグネス・ベッチについて」同集録、一六一～一六三頁、一九八九年。

(三) この資料はロンドンの Greater London Record Office and History Library よりお送りいただいた。

(四) レイチェル・ウィリアムズ Rachel Williams（一八四〇～一九〇八）。ナイチンゲール看護学校の卒業生。一八七三年ミス・プリングルがエディンバラ王立救貧院病院に派遣されたとき副婦長として同行する。一八七六年、セント・メアリ病院のマトロンとなる（コープ『ナイチンゲールと六人の弟子』七三～八五頁、医学書院、一九七七年）。

(五) シスターは英国のとくに病院内での独特の呼び方で、マトロンの下につく中間管理者看護婦に対する尊称で、カトリック教会でいうシスターとは意味が異なる。ロンドンの病院などでは公用語となっている。

(六) この写真はエディンバラ王立救貧院病院看護学校の百年記念誌に載せられたものである。同誌九頁。

(七) R・L・スティーブンソン Stevenson, R.L.（一八五〇～一八九四）はスコットランドの小説家、詩人。『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』の作者。晩年を南太平洋のサモア島で過ごした。

(八) Transcript of Training Report of Agnes Vetch from Register of Nurses Training in the Royal Infirmary of Edinburgh, Dec. 1873—Aug. 1893 (LHB 1/97/1)

(九) ナイチンゲール看護学校の初期の卒業生の訓練登録簿をみると、人物の評価で "Excellent" のつく者は少ない。また病気となる見習生が多かったことがわかる。(Baly, M.E. Nightingale Nurses–The Myth and Reality, Maggs, C: Nursing History–The State of the Art, p. 47—59., Croom Helm, 1985)

(一〇) Baly, M.E., Florence Nightingale and the Nursing Legacy, p. 5—19. Croom Helm, 1986.

(一一) 福田邦三、永坂三夫、久永小千世訳『聖トマス病院ナイチンゲール看護婦養成学校一〇〇年のあゆみ』一一頁、日本看護協会出版、一九七三年。

(一二) セーマー、L・小玉香津子訳『看護の歴史』一八四～一八五頁、医学書院、一九七八年。

(一三) (一二) に同じ。一八六頁。

(一四) Turner, A.L., The Royal Infirmary of Edinburgh Bicentenary Year 1729~1929, p. 18—19. Oliver and Boyd, Tweeddale Court, Edinburgh, 1929.

(一五) (一四) に同じ、三九頁。

(一六) 文献 (九)、四三頁。

(一七) アンジェリク・ルシル・プリングル Angélique Lucille Pringle（一八四六～一九二〇）。エディンバラ王立救貧院病院看護学校のマトロンを務めた後、ロンドンに戻り、ワードローパー夫人の後任としてナイチンゲール看護学校の第二代マトロンとなる。文献 (四)、五三～七一頁。

(一八) 文献 (九)、四二頁。

(一九) Lobban, R.D., Edinburgh and Medical Revolution, p. 40, Cambridge University Press, 1988.

(二〇) Donahue, M.P., Nursing–The Finest Art– An Illustrated History, p. 319, The C.V. Mosby, 1985.

(二一) (一二) に同じ、一七九頁。

(二二) (一二) に同じ、一八三頁。
(二三) The Japan Weekly Mail, Sept. 10, 1887.
(二四) 東大関係雇外国人教師書類—雇用外国人教師名簿、自明治二年至昭和二年。
(二五) 高橋政子『写真でみる日本近代看護の歴史』二八頁、医学書院、一九八四年。
(二六) 大日本実修女学会編『昭憲皇太后御一代記』一七六頁、公益通信社、一九一四（大正三）年。
(二七) 「第一医院看護婦卒業」『東京医事新誌』第五五三号、二九頁、一八八八（明治二十一）年十一月三日。
(二八) 中里龍瑛「東大看護八〇年の創業記(1)」『看護』二一巻一二号、一〇九頁、一九六九年。他の卒業生の卒業証書にこの記述はみられない。
(二九) The Japan Weekly Mail, Nov. 17, 1888.
(三〇) 石原明「絵でみる看護史六七」『看護教育』第七巻五号、表紙、一九六六年。
(三一) 陸壮三朗『東京大学医学部付属医院総覧』一六九頁、一九二九（昭和四）年。
(三二) (一) の文献に同じ。
(三三) 亀山美知子「アグネス・ベッチ考」『京都市立看護短期大学紀要』第一三号、五頁、一九八八年。トーマス・リンゼ Thomas Lindsay はスコットランド一致長老教会の宣教師。日本の看護婦養成に強い関心をもっていた人物、とされている。
(三四) 石原明『高等看護学講座　三　看護史』口絵八頁、医学書院、一九六一年。
(三五) 文献（三五）、二六頁、写真三八より引用。この写真と同じものが昭和七年六月二十六日付の東京日日新聞に掲載されている。

（慈恵看護専門学校）

The Royal Infirmary of Edinburgh and Agnes Vetch

by Machiko HIRAO

In the early stages of the nursing education system in Japan, three foreign nurses, M.E. Reade, Linda Richards and Agnes Vetch, exerted a great deal of influence. Although it is known that Ms. Reade and Ms. Richard came from the U.S.A. as missionary nurses, little has been known about Ms. Agnes Vetch.

Recently, however, some informatin about Ms. Vetch has been obtained from Britain. In "The centenary edition of the Pelican and Nurse's League Journal of the Royal Infirmary Edinburgh School of Nursing, 1972" we find the "Transcript of training reports of Agnes Vetch from register of nurses training in the Royal Infirmary of Edinburgh." According to these materials, Ms. Vetch was born in Edinburgh in 1842. She graduated from the Royal Infirmary Edinburgh School of Nursing in 1875, followed by work as a member of the staff there until 1881. After that she sailed for China because her brother was there as a medical missionary. While she was in Asia, she came to Japan and taught the Nightingale system of nursing. She stayed in Tokyo and taught the science of nursing at Ikadai-gaku-Daiichi-Iin (now the University of Tokyo) from 1887 to 1888. She trained 28 Japanese nurses, and one of them was specially educated as a teacher. Following that, she went to Australia and eventually to her homeland where she died at the age of 100.

The Nightingale system of nursing had great influence on the early stages of the nursing education system in Japan.